

女性が女性を殺し合う

たかまつ なな

つい最近、先輩が会社を辞めた。理由は、子育てと仕事を両立できないから。平成も終わり、令和の時代になってもいまだにこんなことがあるのか。

社会は、まだまだ男社会。もちろん女性もいるが、苦勞してきた女性はなかなか助けてくれない。「私はこんなにつらくて、子育てと両立したのに、あの若者は、仕事の手を抜くつもりなの?」。女性が活躍するために、本当に必要なのは、女性の理解なのかもしれない。比較的女性が働きやすいと言われていた「資生堂」においても、育休や産休が取りやすいがゆえに、子どもがいない人や未婚女性に仕事のしわ寄せがいくという問題「資生堂ショック」が起きて話題になった。会社を経営する上では女性の声を聞きすぎると、きりが無い。だから、歯止めをかけるために、私の先輩は犠牲になったのかもしれない。

つい最近、乙武洋匡さんとこんな話をした。世の中を変えるには、「制度」と「意識」が必要。乙武さんは、意識を変えることに限界を感じたから、今度は制度から社会を変える。そのために、国会議員の中に障害者がいないから、その声を代弁しようとしたと。しかし、女性議員は0ではない。女性議員は私の先輩のような人を救うためにいると私は思う。ただ、この女性議員たちもまたマッチョな世界で育ちすぎ、本来の女性の立場に寄り添いきれていないのではないのか。自分の苦勞を次世代に押し付けたくないという考えにならないのは発想が貧相だ。女性の中で対立しては私たちの環境は変わらない。

女性議員が増えると、議員の質が下がるのか。多様な声が反映されない議会こそ、議会の質が下がるのではないのか。地方議会に目を向けると、女性や若者がいない地域が多い。4月の統一地方選挙では、初の女性議員誕生という自治体のニュースを目にして驚いた。多様な声が反映されるためには、候補者を多様にしなければならない。私は全国の学校へ出張授業に行き、芸人が楽しく主権者教育を行っている。でも、主権者教育では限界なのだ。候補者をいかにして増やすか。それが日本の民主主義の方向性の決定打になるだろう。



PROFILE

たかまつなな：(株)笑下村塾取締役。「笑いで世直し」をモットーに(株)笑下村塾を設立。お笑い芸人が先生となり、主権者教育「笑える！政治教育ショー」の出張授業を全国の学校で行う。悪い政治家を見抜く人狼ゲームや、逆転投票シミュレーションゲームなど、選挙に行きたくなくなるエンタメ要素の強い学習教材を開発。著書に『政治の絵本』。社会起業家の一方で、お笑い芸人として「エンタの神様」や「朝まで生テレビ」などにも出演。